# Un petit cafe de Kobe 2003 その⑧

## バリアフリーも反戦運動も”自然体”

信時　哲郎

Cafe Nafsha（ナフシャ）
神戸市兵庫区永沢町四―四―十四
共同印刷ビル一F
TEL　078（576）5630
営業時間　11:30～21:00
定休日　月曜
http://fox.zero.ad.jp/~zar78600/

新開地って知ってる？　講義で神戸について話す際、最初にたずねることにしている。神戸近辺で生まれ育った学生なら、ほとんどが「知っている」と答える。しかし、たいていの場合、「電車の行先表示に出ている所」という程度の認識でしかない。ここが西の浅草と言われるほどの興行のメッカであったこと、そしてNafshaという個性的なカフェのある町であることを知っている学生は、まだまだ少数だ。

Nafsha（ヘブライ語で「宇宙の根源」の意）ができたのは一九九六年十月。阪神大震災による被災障害者支援のボランティア団体であるら「百番目のTシャツ」の活動を手伝っていた生頼麻里さんが、いろいろなジャンルの人や情報が集まる場所を、多くの人々が普通に、平和にほっとできる場所を……と思ってカフェの設立を思い立ったのだという。

「その時々に思ったことを、少しずつでも実現していきたい。」これが彼女のモットーだ。長田区でピアノ教師をしていた生頼さんが、震災を期にボランティア運動に参加し、カフェの店長になるのは自然な流れだった。店内をバリアフリーにすることも自然であった。毎日の生活が快いものであることを願えば、オーガニックの食材を使うことにもなろうし、相手国のことを考えればフェア・トレードの商品を手に入れようと思うのも自然である。そして、理由さえ定かでない戦争など行うべきでないとして、店先に黄色い旗を掲げることになるのも、とても自然な流れであった。

そんな「自然体」の生頼さんであるから、カフェには、自然に多くの人が集まるし、多くのイベントも開催される。「アレクセイと泉」で知られる映画監督の本橋成一さんによる「ナージャの村」や「イラクの小さな橋を渡って」の写真展、東南アジアの民族音楽やJAZZ奏者の坂田明トリオのライブ、ガッツくんTシャツのイラストを描いた湧島克己さんの原画展……

なるほど「自然体でやってきた」という言葉にウソはないのだろう。しかし、世の中の流れよりも、いつも半歩だけ早く何かに気づき、そして行動に移す……　これは稀有な才能と言うべきではないだろうか。

「私が特に情報に敏感だというわけではないんです。ただ知人にくっついていろんなことをしているうちに、いろんなことが見えてくるというだけで……」

震災前、新開地にあった菩薩茶屋という店の新年会で、福原遊郭で三味線流しをしていた老人に出会い、その人柄と芸に惚れこみ、ライターの友人に本を書いてもらったというのも情報感度のよさ、行動の早さ、そして感受性の豊かさのなせる技だろう。

新しいファッションを提言するカフェは、三宮を中心に数多くできてきた。しかし、もっと幅広い層に向けて、もっと生活全般に渡る「文化そのもの」を提言しようとしているカフェはまだ少ない。かつて日本全国に向けて文化を発信していた新開地に、新しい文化の発信源ができたというのは、果たして単なる偶然なのだろうか。

| | |
|---|---|
| コーヒー | 三五〇円 |
| オレ | 四〇〇円 |
| チャイ | 四五〇円 |
| バナナケーキ | 四〇〇円 |
| タイカレー | 八〇〇円 |
| アブラハムさんのカレー | 八〇〇円 |
| 玄米定食 | 九五〇円 |
| お昼の、のせごはんランチ | 七〇〇円 |

など

店内のテーブルと椅子は、工芸作家・椿崎和生さんの作品。廃材でできている。

店の入口をはじめ、バリアフリーの配慮はあちこちに施されている。